

井上靖

幼き日のこと
西域物語

西域物語

幼き日のこゝろ

井上靖

新潮社版

西域物語・幼き日のこと

〈井上靖小説全集27〉



昭和50年5月20日発行

昭和52年10月30日 3刷

定価 950円

© Yasushi Inoue, 1975.
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(〇三)二六六一
五一一一、編集部(〇三)二六
六一五四一一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

西域物語	五
幼き日のこと	一〇三
四つの面	二七
別れの旅	三六
ある女の死	二五一
ボタン	二六五
冬の外套	二七五
満月	二八三
青葉の旅	二九六
一年契約	三二八
ある交友	三三
ハムちゃんの正月	三六

とんぼ

凍れる樹

面

馬とばし

春の入江

北国の春

自作解題

三五五

三六五

三九一

四〇三

四二二

四三〇

四四三

装画
加山又造

井上靖小説全集

第27卷

西域物語

序 章

私は学生時代に西域（はなは）というところへ足を踏み入れてみた
 と思った。本当に西域に旅行できないものかと考えた時
 代がある。西域という言い方は甚だ漠然としたものである
 が、これは中国の古代の史書が使っている言い方で、初め
 は中国西方の異民族の住んでいる地帯を何となく総括して、
 西域という呼び方と呼んだのである。だから昔は、インド
 もペルシャも西域という呼称の中に収められていた。要す
 るに中国人から言えば自国の西方に広がっている未知の異
 民族が国を樹たてている地帯を、何もかもひっくるめて西域
 と呼んだのである。だから西域という言葉の中には、もと
 もと未知、夢、謎、冒険、そういったものがいっぱい詰め
 込まれてある。その後インドやペルシャは西域とは呼ばな

くなり、西域というと専ら中央アジアに限定するようにな
 って今日に到っている。民族争覇（ちうば）の派手な歴史的事件がこ
 の広大な沙漠地帯を舞台として次々に起っており、未知、
 夢、謎、冒険といった諸要素がこの地域に集中している観
 があるからである。そして現在のように国境が定められ、
 隊商が城邑（じやうい）から城邑へ、オアシスからオアシスへ自由に往
 来することができない時代になっても、西域といった呼び
 方がある限り、初めに持った未知、夢、謎、冒険といった
 要素は消えていないのである。私はいま中央アジアという
 呼び方をしたが、これも亦甚だ漠然とした呼称であって、
 明確にその範囲が決められてあるわけではない。まあ、ア
 ジア大陸の中央部、海に出口を持たない内陸地域で、東は
 ゴビ沙漠から西はカスピ海に到る広大な地域と考えていい
 だろう。

従来この中央アジアはバミール高原を境にして東を東ト
 ルキスタン、西を西トルキスタンと呼ばれて来ているが、
 現在の政治的概念で言えば、東トルキスタンは中国側、西
 トルキスタンはソ連側ということになる。中国側の新疆ウ
 イグル自治区に当る東トルキスタンは目下旅行者はいれ
 ないので判らないが、ソ連領の西トルキスタンは往時の西
 域ではない。カザフ、ウズベク、キルギス、トルクメン、
 タジクの五共和国が誕生しており、往時のオアシスの城邑

は、大ビルディングの建ち並ぶ近代都市に生れ変わるうとしており、不毛の沙漠地帯には運河が何本も走り、その流域をみごとに緑地帯、みごとに耕地帯に変えている。多かれ少なかれ、中国側の東トルキスタンも同じことであろう。

同じ西域という呼び方をして、西域の実態はすっかり変わったものになりつつある。併し、依然として変らないものもある。幾ら緑地帯が縦横に走っても、なお沙漠は沙漠として依然として大きな不毛の骸を横たえており、アム・ダリヤ、シル・ダリヤは悠々として流れ、天山、パミールには四時雪を戴いた六〇〇〇メートル級の山々の鋭い刃先が天を窺っているのである。そしてそこに住む算えきれない異民族は、それぞれの言葉と、それぞれの風俗習慣を失わないで生きているのである。

そして、もう一つ変らないものがある。それは歴史である。過去に背負った歴史である。これだけはどうすることもできない。日本国内の戦争とは異って、異民族同士の争覇であり、結果的に見ると、それは民族の移動でもあり、その民族が持った文化、宗教の移動でもある。過去に於て西域が持った歴史を振り返ってみると、アレキサンドロスの遠征を初めとしてアラブの侵入もあれば、モンゴルの侵入もある。最も大きいものだけを拾っても、その度に西域はすっかり異なったものになっている。そしてその歴史の爪跡

はいまでも到るところに遺されている。アラブの遺した爪跡もあれば、モンゴルの遺した爪跡もある。そしてまた、気の遠くなるような長い歳月はたくさん歴史の欠片を土の中に埋めてもいる。その大部分は私たちの知らない歴史である。中央アジアという広大な地域は、今日も依然として、私には「西域」である。未知、夢、謎、冒険、そんなものがいっぱい詰まっている。近代文明の大きな力がそれを全く異なったものにしようとする手をかけて始めているが、なかなかどうして、そんなことで手に負えるしろものではないのである。

私は三年前の一九六五年と今年（一九六八年）の二回、西トルキスタンを旅した。この二回の旅で、西域の歴史の上には必ず登場して来るサマルカンド、ブハラ、タシケントといった諸都邑、沙漠に囲まれている全くの沙漠の町アシュババード、ウルゲンチ、ヒワ、それからパミールの山ひだの中の新しい街ドゥシャンベ、史記に出て来る大宛国——現在のフェルガナ盆地に散らばっている諸都市、アンディジャン、マルギラン、コーカンド、フェルガナ、或はまた玄奘三蔵の『大唐西域記』や『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』などに登場して来る天山の麓の故地と目されているトクマク、アク・ベシム、あるいはフルンゼ、そういうたと

ころに一応足を踏み入れてみた。

そして、この西域の旅で最も楽しかったことは、その土地が持っている歴史を考えたり、思い出したりすることであった。私は歴史家でも歴史研究家でもないで、勿論私の考える歴史というものは、甚だ片寄ったものであるし、たまたま持合させた僅かの知識の中からその土地に関するものを引出す以外仕方ないのであるが、それでも、今まで持っていた歴史の欠片が、その土地に置いてみると、まるで異った生き生きとしたものになるのを感じた。

私は西トルキスタンの旅で、最近ソ連の考古学者の手で掘出された三つの遺跡を見ている。一つはペンジケントの遺跡で、ここは曾て一二〇〇年前にソグド人が住んでいた城邑であるが、アラブの圧政に耐えかねたソグド人たちがこの街を捨ててから、そのまま土中に埋まってしまったところである。もう一つは現在発掘を始められているアク・ベシムの遺跡である。これも亦同じ時代の遊牧民たちが営んでいた城邑である。それから古代サマルカンドの眠っているアフラシヤブの遺跡。

この三つの遺跡を見て強く感じたことは、いずれも見はるかすような高原風の地帯にあることと、それぞれが雪を戴いた天山の前山が遠く見えている何とも言えぬ美しい場所であるということであった。そういう点では、三つの土

中から出て来た往古の城邑は、そのまん中に立つ限り區別ができないほどよく似ているものであった。古代の遊牧民たちは、異民族に追われ、追われて、その居を移しているが、いずれも申合させたように帳幕を営むのに眺めの雄大な美しい場所を選んでいたのである。

私が歴史家であつたら、三つの出土遺跡からたくさんの方重なものを拾うに違いない。併し、小説家の私にはそうした知識の持合せもないし、そういう芸当もできない。ただその城邑を構えた場所の美しさに感心するだけの話であるが、ソグドを初めとする古代遊牧民の持つ民族の生命のようなものが、これまでとは異ったものになって、こちらに迫ってくる。これから歴史の書物でソグドとかサカ人とかにお目にかかる度に、その民族の姿がこれまでとは違つたものに映ってくることだけは確かである。

私はまたいくつかのタキを見た。タキというのはアーチという意味であるが、同時にいくつかの丸屋根の組合せからなるバザールの意味でもある。これはふつう大きな通りの十字路にあり、ブハラとヒワのものが最もよく保存されていた。ブハラではこのバザールの一つは宝石市場とも呼ばれていた。十字に交叉している通りにすっぽりと屋根をかぶせたような恰好の商店街で、十字に交叉しているところが多少広くなつていて、その高い屋蓋の天窓から光線

が落ちるようになっていく。内部はひどく暗い。現在は勿論店舗は並んでいないが、タキがいかなるものか、ほぼ完全な形でそれを知ることができる。なるほど宝石市場と呼ばれただけあって、たしかにここでは宝石が売買されたに違いないと思われた。はるばると沙漠を越えて来た隊商の商人たちは、小さい宝石の粒を握ってこの薄暗い屋内商店街へはいつて行く。薄暗い中で商人たちの眼が怪しく光り、掌の上に載せられてある小さい宝石の粒が怪しい光を発している。雑多な人種がうごめいているバザールの内部を眼に浮べると異様なものである。乱れ飛んでいる言葉も、群がり集っている人々の服装も、皮膚の色も、頭髮の色もそれぞれに異っている。そうした内部の到るところで宝石の鑑定と値踏みは行われている。なるほど、宝石の売買取引は、明るい陽の光の射している戸外より、こうした薄暗い屋内店舗の方がふさわしい場所であるに違いない。

もう一つのヒワのバザールの方は十字路になっていない。一本の商店街が伸びているだけで、トンネルの中に、商店が両側に並んでいると思えばいい。こちらは宝石市場とは呼ばれないで、奴隸市場と呼ばれていた。専門の奴隸市場ではないが、時には奴隸も売買されたのであろう。この方は少し明るい。このトンネル商店街の中央に一つの横門があって、そこから隊商宿に通じられるようになっていく。

隊商宿は大きい広場を取巻くように造られてあり、その大きい広場は駱駝のパーク場である。

現在、ウズベク共和国ではほぼ完全な形で遺っているタキはこの二つしかないそうである。これを見たお蔭で、私には隊商というものが、いくらかはつきりした形をとって眼に浮んで来るようになった。何十頭の駱駝を並べて長い沙漠の旅をして来た商人たちは、それぞれの街で、街の入口にある隊商宿にはいる。宿の前には駱駝がいっぱい詰まっている。駱駝の鳴声を聞きながら商人たちは寄宿舎のような小さい部屋部屋にはいつて眠る。翌朝になると、駱駝の群れの間を縫って、商人たちは屋内市場の中へはいつて行く。一番持運びが簡単で、大きな取引ができるのは宝石である。商人たちは手に手に宝石を握りしめている。賈物もあれば賈物もある。暗い中で発するその光沢がすべてを決定する。

沙漠で生きる人たちにとって、どうしても必要なものは、生活に必要なものを売買するもう一つの住民たちのバザールである。この方は露店である。フェルガナ盆地の古い町マルギランのバザールを見たが、これがブハラ、サマルカンド、その他でたくさん見たバザールの中で最も凄まじいものであった。フェルガナ盆地には五十の民族が雑居しているというが、その五十の民族がみんな代表者を出してい

るのではないかと思われるほど、そこに集っている人々の服装も顔立ちも言葉も異っていた。マルギランは古く静かな街であるが、ここだけには夥しい数の人々が渦巻き、老若男女、それぞれが売ったり買ったりしながら、生きるために声高に叫び、賑鳴り合っていた。そこで売買されているものは雑多であった。驢馬のような大きいものから、種子、粉末のような小さいものまであった。まさに中央アジアの心臓であった。おそらく昔から少しも変らぬ姿で、このバザールは今日に到っているのであらうと思われた。

中央アジアの古い都市の回教寺院の塔の頂は申合わせたように青い。空の青さとも海の青さとも異った一種独特の人間の心を吸い取ってしまふような深い青さなのである。沙漠の旅行者は、また沙漠の都市の住人は、この青さを眼にすることなしには、その日その日を送れなかつたのである。この塔頂の青さはおそらく沙漠で生きる人たちが生きるために、どうしても必要なものであると思われる。沙漠の旅行者は遠くからこの青い陶板で包んだ塔の頂を眺め、そしてそれに吸い込まれるようにして城門を持った聚落へはいつて行ったのであらう。

中央アジアの河川で一番有名でもあり、往古から沙漠の川の代表と目されているのはシル・ダリヤとアム・ダリヤである。シル・ダリヤをその上流であるフェルガナ盆地で

見たが、水量の豊かな美しい川であった。その水を引いた何本かの運河が広大なフェルガナ盆地をみごとに灌漑にしているくらいだから、その水量が豊かであるのは当然なことである。併し、キジル・クム沙漠の一角でその下流の姿を眼にすると、見違えるほど河相は貧しくなっている。下流へと流れ降るに従って水を少しずつ沙漠の土と天日とに吸われ、流域の樹木に奪り上げられ、次第に水量は少なくなり、河幅も狭くなつて行く。下流部で見たアム・ダリヤの場合もほぼ同じであった。下流になるほど支流の水を集めて大きくなつて行く普通の川というものとは凡そ違つたものである。沙漠の川は流れ降るに従って、川は瘦せ細つて行くのである。

天山から流れ出しているゼラフシャン川はその流域のオアシス地帯にペンジケント、サマルカンド、ブハラといった諸都邑を作っているが、その下流の末端は沙漠の中に消えると言われていた。実際に消えていたのであらう。沙漠の川として当然持たなければならぬ運命であるが、併し、沙漠の中に消える川というものが、長く私には不思議に思えてならなかつたのである。現在はゼラフシャン川の水も、それが沙漠の中に吸い込まれて姿を消すわがまは許されていない。ウズベク共和国はその水を集めて、みごとに人造湖を造っている。

大宛の汗血馬 1

古代中国の天子が例外なく最も手を焼いたのは匈奴政策であった。匈奴は前四世紀末より三世紀にかけて五〇〇年ほどの間、中国の歴史に中国にびったりと寄添って現れて来る。この北方の剽悍な遊牧騎馬民族のお蔭で、中国の歴史はすこぶる多彩なものになっている。万里の長城というとんでもないものを築いたのも匈奴のためであったし、異族に降嫁する王昭君の悲劇も匈奴懐柔政策の産物である。と言って、攻勢に出てもひとすじ縄で行く相手ではない。漢の高祖でさえ、うまうまと大軍に包み込まれてしまつて、危うく一命を落しかけている。

硬軟さまざまな政策をとつた歴代の天子の中で、最も積極的に攻勢に出て、たとえ一時的であるにせよ、匈奴を国境から遠くに奔^{はな}らせたのは漢の武帝であろうか。その対匈奴戦に於て嚇^{おそ}々たる武勲をたてた衛青、霍去病等は名將軍として歴史にその名を留めるに到っている。同じ漢の武帝の時に、初めて西域に通ずるという東西交渉史の上における文字通りの画期的大事件が起きたが、これまた匈奴のお蔭であると言つていいようである。

ある時、匈奴の捕虜が言つた。

「匈奴の单于（主権者）は月氏を攻めて、王を討ち取り、その王の頭蓋で洒落れたカップを作り、それで酒を飲んでいる。これを知つて月氏の人たちは匈奴に對して共に天を戴かざる氣持を持ち、どこかの国と協力して匈奴を撃ちたがつているが、あいにくその協力者が見付からず、徒らに恨みをのんでいる許りだと聞いている」

この捕虜の言葉が何人かの口を経て、武帝の耳にはいった。武帝は即座に自分こそその月氏の協力者にならうと思つた。武帝は一度決心したことは、すぐ実行に移さずにはいられなかった。天下に布告して、月氏に使用するものを求めた。併し、月氏という国がどんな国か、またそれはどれだけ遠隔の地にあるか、詳しいことを知っている者はなかった。中国よりずっと西方に月氏という国があるぐらゐの漠然たる知識しか持つていなかった筈である。玉門関という西方国境の門を出ると、一口に西域という言葉で総括されている未知の地帯が拡がっているだけのことである。その奥行も、深さも判つてはいない。

やがて何日かすると応募者の名簿ができ上がった。どうせ生命知らずの無鉄砲な連中に決つていたので、そこに記されてある身分や経歴など当てにはできなかった。が、その中に一人、郎官の身で応募した者の名があった。郎官と

言えば、兎も角宮中勤めの官吏である。名は張騫ちやうけんと言った。武帝は直ちにその人物を引見した。

「汝は月氏に使用するというが、月氏という国について何か知っているか」

武帝が訊ねると、

「とんと存じませぬ」

三十歳ぐらいの軀からだの頑丈な男は答えた。意志が強そうで大きな眼を持っている。

「何年ぐらいで帰って来るつもりだ」

「見当付きませぬ」

「生きて再び帰って来れぬかも知れぬぞ」

武帝が言うと、

「そうかも知れませぬ。が、畏おそれながら天子がお求めになった以上、誰かが応じなければなりません。それならば、他の者が応ずるより、きつと自分の方が適任だと考えたのであります」

張騫は答えた。この言葉は武帝の氣に入った。

張騫は百余人の従者を与えられて、未知の地帯西域の旅に立った。正確には張騫の年齢も判っていないし、西域の旅に立った年も判っていない。『史記』にも『漢書』にも、そうした記述はないが、『資治通鑑しじつ』の推定によると出発したのは建元二年（西暦前一三九年）ということになって

いる。

張騫が帰国したのは、それから十三年後であった。武帝が忘れた頃になって、張騫は匈奴の女と匈奴人の従者だけを伴って帰って来た。匈奴の女は彼の妻であった。張騫は己が過した十三年について語った。玉門関を出ると直ちに匈奴に捕われ、そこで十年の歳月を過し、妻も得、子供もできたが、匈奴の監視のゆるんだ時、従者を随えてそこを脱出した。そして沙漠の国々を経て、漸くにして目的地である大月氏国に到ったが、すでにその王は匈奴のために殺され、太子が代って王位についていた。新王は匈奴と事を構えるような気持は微塵ちりも持っていない。漢と軍事同盟を結ぶことなどんでもない話であった。張騫は一年余大月氏国に留った上で帰国の途にいたが、帰りも亦匈奴に捉えられ、慘憺たる苦勞を嘗なめていた。

大月氏と軍事同盟を結ぶという目的は果さなかったが、武帝には張騫の話はすこぶる魅力あるものであった。

「匈奴から脱出し、大月氏国を目指します時、大宛という国を通過しました。この大宛という国は、漢の西、匈奴の西南、漢を隔たること一万里のところにございます。習俗は農耕で、稲麦いねむぎも植えており、果物も作っております。そこで産する葡萄酒ぶどうしゅのうまさと来たらこたえられませぬ。そうそう、この国で報告中上げねばならぬのは、この国で産

する馬のことでございます。汗血馬と申しまして血の汗をかく奇妙な馬でございますが、天下にこれ以上の馬はないとされております。馬格は立派で、毛並みはつやつやとしており、人の心も判るほど伶俐で、一日よく千里を走ると言われております。この国の人口は数十万で、大小七十の城を持ち、兵はいずれも騎射をよくします。何しろ乗っている馬がみごとなので、騎乗の射撃のうまいのは当然なことでございます」

それからまた張騫は続けた。

「大宛の北は康居、西は大月氏、西南は大夏、東北は烏孫、東は杆突、于闐」

武帝の知らない国々が次々に張騫の口から飛出した。張騫は大月氏までしか行かなかったもので、大宛、康居、大月氏以外の国のことは聞いて来たことを上奏したのである。

武帝の心は、張騫が口を動かす度にひどく明るい豊かなもので眠らんで行った。未知の、異民族の住む国々が大きい夢をもって飛込んで来た。そこで産する珍奇な物産も欲しかったが、取り分け関心をもったのは大宛という国の名馬であった。血の汗をかく馬など見たことも聞いたこともなかった。天下無双の名馬というのなら、それを手に入れたと思った。大月氏と軍事同盟を結んで匈奴を撃つ夢は壊れたが、代りに大宛国の名馬を駆使して匈奴を撃つ夢が新

しく生れたのである。同じ匈奴を撃つにしてもこの方がずっとすっきりしている。

張騫が報告した大宛国というのは現在のウズベク共和国のフェルガナ盆地に樹てられていた国であり、康居国というのは現在のキルギス共和国の地に当たっている。そして武帝の命に依って張騫が目指した大月氏はブハラ東方に樹てられていた国である。

張騫はこの旅に依って、最初の西域の報告者として東洋史の上に不朽の名を留める幸運者となった。張騫は玉門関を出、タクラマカン沙漠の横たわっている東トルキスタンを通過し、更に天山、バミールのアジアの屋根を越えて、西トルキスタンの地に足を印しているのである。タクラマカン沙漠を通過するに当って、張騫は天山山脈の南麓に沿っているいわゆる天山南路を採ったと見られている。中国から東トルキスタンを目指すには古来三本の道があった。天山の北麓沿いに進むのを天山北路、その南麓沿いに進むのを天山南路と称した。このほかにタクラマカン沙漠の南辺の国々を経廻って行く道があり、これを西域南道と称した。従って西域南道に対する呼び方を見ると、張騫の採った天山南路は西域北道と言うことになる。中国側東トルキスタンからソ連側西トルキスタンへと、中央アジアを横断する大旅行をやったのけているのである。大冒険家と言っ

でもいいし、大探検家と言ってもいい。

そして前記の三本の道は天山あるいはバミールの山塊群を越えて、西トルキスタンにはいるのであるが、今日地図を見ると、その入り方が二つある。一つはウズベク共和国のフェルガナ盆地にはいる道であり、一つはキルギス共和国のチュール盆地にはいる道である。この二つは、いわゆるシルク・ロードの主要な幹線として東西の文化交流のために大きな役割を果たしているが、張騫の場合は大宛国の所在地であるフェルガナ盆地へと降り立って行ったのである。

張騫以前にも、中国から東トルキスタンへ、更に東トルキスタンから西トルキスタンへと、水がにじみ流れるように、人間の往来はあったに違いない。その途中にタクラマカン沙漠が横たわってしようと、天山やバミールの四時雪を戴いている峰々がいかに厳しく遮さかっていようと、そんなことにはお構いなしに、人々は何かの目的をもって往来していたのである。そして、リレー式に、西トルキスタンの物資は東トルキスタンの地に運ばれ、それはまた中国にもはいつていたに違いない。またその逆なコースをとって中国の産物は西方にも渡っていったであらう。バトンは次々に受けつがれていたのである。

そして、そのような人間の意志の軌跡のようなものとして、東西交渉路は天山やバミールの山中を細い糸となつて、

あるところはくっきりと、あるところは絶え絶えに、あるかないかの細さとなつて続いていたのである。機上から天山やバミールを見ると、何よりも人間を拒否している大きな神の意志を感じる。ここだけは人間どもを一步たりとも踏込ませないぞといった、そんな神の意志を感じる。併し、太古から人間はその底知れず奥深い山のひだひだに分け入り、そこに自分たちの歩く道を刻んでいるのである。

わが張騫は、そうした道を通して、最初の公人として天山の陰を越え、天山の向う側にある明るい平原に降り立ったのである。明るい平原という言い方をしたのは、もうそこから、天山やバミールのような世界の屋根はなくなり、アラル海、黒海方面へと際限なく広い沙漠地帯が広がるからである。

私はフェルガナ盆地の南部アンディジャン州を、張騫には申しわけないが、自動車クルマでドライブした。大平原にはみごとに舗装道路が走っている。ひと口にフェルガナ盆地と言っても五二四〇〇平方キロメートルの大平原で東西三二〇キロメートル、南北一七四キロメートル、ヨーロッパの幾つかの国に相当する大きさである。東、北、南は山脈で囲まれ、西のホージェント方面だけが出入口になっている。この盆地は往古から今日までに何回か異民族の侵寇ひんこうを受けているが、アレキサンドロスもアラブも、モンゴルもみな

この西部の出入口から侵入して来ているのである。そして北のチャツカル山脈と東の天山の二つに源を発するシル・ダリヤが盆地の北部を流れており、またこの水を引いて造った運河が何本か走っている。詳しく言うくと、運河は北に一本、南に二本、そのほかに中央の一本が目下造られつつある。中でも南部の一本はフェルガナ運河と呼ばれ、長さ三五〇キロ、幅二八メートルの大きなもので、これらの運河のお蔭で盆地は着々と耕地化されつつある。

言うまでもなくこのフェルガナ盆地はウズベク共和国の一部であり、居住者の大部分はウズベク人であるが、他に五十の民族を数えることができる。現在はフェルガナ、アンディジャン、ナマンガン、コーカンドの四つの都市が、それぞれ約九〇キロの間隔で盆地の周辺に散らばっている。このうち、アンディジャン、コーカンドの二都市は、ホージェント、クワ、ウズゲンと共に紀元前からあったと言われる古い町である。

張騫が訪れた頃のこの盆地がどのようなものであったかは想像できないが、併し、天山を越えて来た張騫はこの盆地の東部、いまのアンディジャン州へ降り立ったことだけは疑うことはできない。そして恐らく盆地の南部を、つまり現在のアンディジャン、ウズゲン、コーカンドを結ぶ線を西へ向って行ったのであろう。そして張騫はホージェン

ト方面の出口からは出ないで、もう一度北部の山脈を越えて康居（キルギス）へはいって行ったものと思われる。康居は天山の前山がすぐそこに見える地帯である。先述したように天山を越えてこの地帯へも降りられるが、張騫はこのルートは採らなかつたのである。そしてここから沙漠の海へ出て大月氏国を目指したのだ。大月氏国は現在のブハラの方とされているが、地図の上に線で張騫の進んだルートを描き、天山の山ひだに、シル・ダリヤの河畔に、沙漠の海のまっただ中に張騫の姿を置いてみると、それはひどく小さいものとして感じられる。

武帝は大宛国の汗血馬を手に入れて、堂々と匈奴に決戦を挑みたかったが、匈奴の度々の侵寇はそれを待つことを許さなかつた。武帝は汗血馬を手に入れることはあと回しにして、ひとまず大將軍衛青をして匈奴を討たしめた。元朔六年（西暦前一二三年）のことである。そしてこの作戦に、十年の捕虜生活を通して匈奴の事情に明るい張騫を校尉として従軍せしめた。果して張騫は匈奴が屯する水草地帯の地理に詳しく、ために軍に利するところ多かつた。この功に依つて張騫は博望侯に封ぜられた。

翌元朔七年、張騫は再び匈奴討伐作戦の一翼を担つたが、こんどは合戦の期日に遅れるという失態を演じた。根っか